

F U E K I

[特集] 福武哲彦教育賞・谷口澄夫教育奨励賞 受賞者の横顔

[活動リポート] 子どもの育ちと学びをつなぐ



第28回福武哲彦教育賞に佐々木美行氏、 第14回谷口澄夫教育奨励賞は、 岡山県立総社南高等学校ダンス部、 山陽女子高等学校地歴部に。

当財団では、岡山県の教育の向上のために著しい貢献をされた個人や団体に「福武哲彦教育賞」を、今後の活躍が期待される個人や団体に「谷口澄夫教育奨励賞」をお贈りし、その功績を顕彰しています。

去る7月21日、岡山市内ホテルで贈賞式を終えた受賞者からお話しを伺い、感想を寄せいただきました。
(財団・植月)

世界へ羽ばたく選手を育成

佐々木 美行 氏（倉敷市立旭丘小学校）



小学校教諭として勤務する傍ら、自ら立ち上げた倉敷フィギュアスケーティングクラブの監督として20年以上若手選手の育成に尽力される。高橋大輔選手の恩師としても名高く、岡山県の学校教育のみならず、スポーツを通じた社会教育向上への貢献が高く評価された。

まず、佐々木先生とフィギュアスケートの出逢いを教えてください。

大学に入学した時、「サークル活動をする！始めるからには、経験者の少ないものがいい」と考えていました。テニスやバレーは経験者がたくさんいてその人達がうまいに決まっている！経験者の中では初心者は十分楽しめないじゃないですか。だったら、経験者の少ないゴルフか乗馬かスケートだと思っていました。馬はかわいいけど世話は大変かな？ゴルフの部室は？と思いながら歩いていた時にたまたま出会ったのが、スケート部の人で、部室はそこだと教えてもらって足を運んだのです。邦楽部に入りたかった友達と一緒にね。季節は春、暑い時に涼しい顔してスケートもいいかな…と勢いで入部しました。その時出会った方が、後に教職についた私をヘルスピア（旧サンピア）に引っ張り出す声かけをして下さった現在岡山県スケート連盟藤井副会長という不思議なご縁だったのです。（私につきあってスケート部に入ってしまった友人はその方の奥様になっちゃいました。出会いは大切です。）

先生がフィギュアスケートの指導において最も大切にしていることはどんなことですか？

「スケート大好き！」という根っこになる気持ちをしっかり育てることです。それが、強ければ、自分で工夫し、早く上手になりたいと頑張って主体的に努力できるし、少しくらい辛くても頑張れますよ。しんどいことも苦になりません。目標を持って、自ら考え自分の意志でスケートを続けていく選手に育つは



ずです。そんな選手は、たくさんの失敗や負けを経験し、その中から多くのことを学ぶことができるでしょう。100人いたら優勝は1人で99人は負けを経験します。負けの中にも進化の手ごたえをつかみ、次につながるものを見つけられたら前に踏み出しができ、もっと練習がしたくなります。へこたれません。大好きになるには、練習を通して「できる喜びと達成感」を味わう体験が必要です。そして、それを共感できる仲間と家族は欠かせません。

なるほど。では、学校教育とスケート。指導するという点で共通点や相違点はありますか？

贈賞式で選考委員長から、今回のキーワードは「指導力」と言っていただき大変うれしかったです。私は、最初にスケートの技術指導より、楽しさや努力の方法・考え方や時間の使い方・練習の意味などを話し合って伝えていきます。練習が軌道にのると、フィギュアスケートのパッジテスト（技術の指標）が受験できるよう、初級課題の指導に入っていきます。そして、上級者（6級以上）には、選手の個性にあったプロコーチのレッスンが受けられるよう線をつなぎます。その頃に、全国大会を経験するのです。それは、子供達が小学校に入学して、仲間とともに多くのことを学び、成長して卒業していくその過程とよく似ています。つまり、フィギュアスケートに出会った子供達に、頑張り方を提案したり、頑張れる環境を準備したりすることは、私にとって学校教育と大差はないのです。それどころか、練習や助言には学校教育のノウハウ（気持ちのつかみ方・伝え方・指導法など）がしっかりと生かされていると思っています。

逆に、大きく違っていると感じることが一つだけあります。それは、スケートがしたいという気持ちをもって集まった異年齢の子供達とスタートを切り、そこからずっと縁が続くということです。親子ともに明確な目的意識があり、それを受けての指導や練習は、明確な目標や夢に向かっての共同作業なの

です。

一方、学校教育は、目標や夢を一人ひとりが違った形とタイミングでもち、その時に備えることが大切で、多様な頑張り方を一定の期間（小学校は6年間）で学習してもらわなければなりません。この違いは、意識していますが、後は、学校教育と同じ感覚で選手とその家族にアプローチしています。

ありがとうございました。最後に受賞をうけての感想と今後の展望を教えてください。

最初は、荣誉ある賞にただただびっくりしました。次に、今までの受賞者のお名前を見て私でいいのかと心配になりました。日頃は前に進むことばかり考えて、過去を振り返らない私ですが、この時ばかりは、数週間どんなことをしてきたのか自分を振り返りました。

私以外にも頑張っておられる先生方は、たくさんおられます。今回は、「社会教育的視点で、現役の先生に」と言っていたいただいたことで、今後広く、そこに光が当たるのだと希望を感じました。だとしたら、賞を頂くことで役に立てると思いました。贈賞式当日は、緊張しましたし、後のプレゼンがプレッシャーでした。今でも、どんなメッセージとして伝わったのか気になっています。それなのに、帰りの車中では、「この喜びを報告したい！」という気持ちが自然とわいてきました。初めての感覚でした。後日、中学時代の恩師で、ことあるごとに絵手紙でエールを送り続けてくださった先生にこの賞を見ていたとき、記念写真を撮りました。私の喜びは何倍にもなりました。

今後ですが、この活動も20年を経過し、進化を続けるための新しい取り組みも始めています。それは、選手経験者の中から高い技能をもつ指導者を育て、将来にわたって高い目標に向かって継続できるパワーを生み出したいです。受賞を励みに、継続と進化を誓い、仲間とともに歩み続けたいです。今後とも力強いご支援をよろしくお願ひいたします。



国内外の大会で好成績

岡山県立総社南高等学校ダンス部



昭和62年創部。県内のみならず、国内外のダンス大会に数多く出場し好成績を収めている。地域行事への参加、近隣学校とのダンス交流も積極的に行い、県内中学・高校のダンスレベル引き上げにも大きく貢献している。

活動紹介

総社南高校ダンス部は、現在部員数が26名で、平日約2時間、休日約3時間という短い時間で活動しています。練習メニューとして、まず身体の基礎練習である筋力トレーニングを行います。それはダンスをする上で体幹を鍛えることが大切だからです。その後、ダンスの基礎練習としてジャズ、ヒップホップ、プロップ、創作ダンスなど多くのジャンルの基礎練習を全員で行っています。全てのジャンルを完璧に行なうことは難しいことではありますが、少しずつでも上達できるよう練習に励み、地域のイベントや県内の発表会、全国大会などで発揮できるよう全員で努力をしています。今までの主な実績としては、ダンスドリル世界大会に3回優勝し、神戸ダンスフェスティバルに2回入選しています。先輩方が残された全国大会や世界大会出場の実績を誇りに思い、今後も目標を持って頑張っていきたいと思います。

受賞をうけて

このたびは、谷口澄夫教育奨励賞という大変貴重で素晴らしい賞をいただき、総社南高校ダンス部一同、大変嬉しく思っています。この賞をいただくことができたのは、先輩方が長年積み上げてこられた努力のたまものです。総社南高校ダンス部の代表としてこの賞をいただくことを大変光栄に思います。この喜びを忘れず、仲間を思いやり、前向きに努力し続け、先輩から受け継いだ伝統を後輩に渡せるように頑張りたいと思います。部活動では辛いこともあります、仲間とともに成し遂げることの素晴らしさ、それを評価していただいた喜びは言葉では言い表せません。受賞を機に、ますます練習に励んでいこうと思います。

また、私たちが活動できるのも日頃から支えて下さっている多くの方々のご指導やご支援があるからです。その感謝の気持ちを忘れず、この賞に恥じないよう、さらに成長し、今よりも活気のあるダンス部にしていきたいと思います。本当にありがとうございました。



瀬戸内海の海底ゴミ問題に取り組む

山陽女子高等学校地歴部



昭和30年創部。平成20年から瀬戸内海の海底ごみ問題に取り組み、回収活動や調査研究、国内外での成果発表では高い評価を受けている。さらに、研究によって得られた知識を地域へ還元する活動にも積極的で、今後の更なる活躍が期待される。

活動紹介

私たち山陽女子高等学校の地歴部は、瀬戸内海で深刻な環境問題になっている海底ごみ問題の解決に向けて、海底ごみの回収活動と啓発活動に取り組んでいます。

回収活動は漁業関係者に協力いただき、漁船から底曳き網を入れて、海底からごみを引き上げて、海底の浄化に努めています。回収環境は自然との開いたり、容易ではありませんが、各自が使命感を持って作業に取り組んでいます。

回収量を大きく上回る生活圈からのごみの発生量があることから、啓発活動は多くの皆様に海底ごみ問題を認知していただくために、色々な角度からアプローチしています。啓発活動の成果は、認知度の大きな上昇として現れました。しかし、問題の認知に留まり、解決に向けた意識・行動の変化に至っていない調査結果から、海底ごみを可視化した海底ごみの「見える化」プロジェクトに取り組み、人と海底ごみとの距離を縮める活動に取り組み、意識の変化を実感することができました。

昨年、スウェーデン・トルコで開催された国際会議で私たちの活動・成果を報告し、高い評価をいただくと同時に、海底ごみ問題を世界共通の環境問題であることを認識しました。美しい瀬戸内海を取り戻せるように、今後も継続的に取り組んでいきたいと思います。

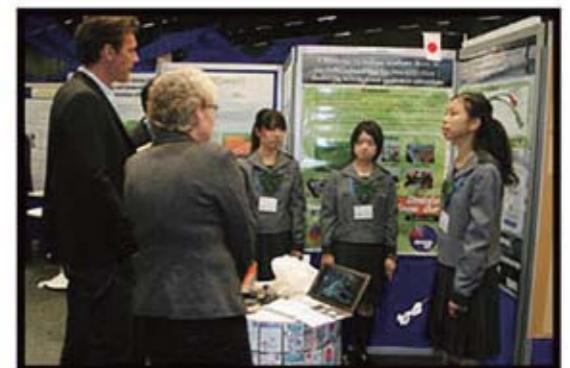
受賞をうけて

今回、素晴らしい賞を受賞させていただきまして、ありがとうございました。私たちの活動を多くの皆様に注目していただき、嬉しく思います。贈賞式で私たちの活動を報告させていただけたことも、海底ごみ問題を解決する為の啓発活動であると考えています。

海底ごみの回収活動は、瀬戸内海へ漁船を出し、船上での長時間の作業です。夏は厳しい暑さの中、冬は冷たい北風が吹く中の作業であり、厳しい回収環境ですが、海底から引き上げられるごみを見ていると、陸上での生活の縮図を表しており、問題の深刻さを感じると同時に、この問題に携わることができた者として、遺り甲斐を感じています。

啓発活動では、県内だけではなく国際舞台でも報告する機会に恵まれたことに、感謝しています。瀬戸内海は今年、国立公園に指定されて80周年を迎えた。瀬戸内海は多島海であり、美しい景観が広がり、海運の要衝であり、私たちは海からの恩恵を受けています。閉鎖性海域である瀬戸内海の海底ごみの原因の大部分は沿岸域にあり、沿岸域での啓発活動に今後も力を入れて取り組みたいと考えています。

長い時間をかけて発生した問題であるので、継続的な活動に今後も取り組み、行政・企業・NPOなど地域の皆様と問題を共有して、連携した取り組みを行いたいと思います。これからも頑張りますので、ご支援宜しくお願いします。



幼児期の潜在的な学びを自覚的な学びに

岡山幼児教育研究会 代表 池内伸江（瀬戸内市立邑久幼稚園長）

（平成25年度教育研究助成）

幼児期の教育は、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う」重要な役割を担っており、義務教育以降の教育の土台作りです。私たちは日々、幼稚園生活全体の中で、何をしなければならないか、何ができるかを自問自答しながら子ども達に関わっています。

本市では3歳児の入園から1年生までの学習面や生活面での成長を「保・幼・小をつなぐ育ちと学びの共通カリキュラム」をとおして継続的に促す取り組みをしています。それぞれ、園の規模も入学する小学校も違いますが、この「共通カリキュラム」を実践していくことで、「基本的生活習慣」や「学びのスキル」がだんだんと身につき、どこへ入学する子も「生活や学び」がうまく小学校教育へつながるようにしています。

以前、私は入学して間もない1年生の保護者からこんな指摘を受けたことがあります。「先生、うちの子は小学校に入ったら幼稚園でできていたこともしなくなったのです。」と。よく話を聞いてみると入学当初、小学校では大きい子が張りきって1年生のお世話をしてくれます。それはありがたいのですが、例えば、幼稚園ではできていた着替えの後の服たたみとか、給食や掃除の時のお当番も全部6年生が手伝ってくれるので、自分は何もすることなくなって家でもしなくなった、というのです。結局、幼稚園での育ちや学びが小学校で生かされていない、という例ですね。これは、教員の側の問題です。「保育園や幼稚園ではここまで育っています」を、つなぐことがおろそかになっていました。

子どもたちは、夢中になって遊ぶ中で集中したり工夫したりすることができるようになり、またやってみようとする意欲をもちます。この時期の学びは、遊びを楽しみ面白くしようとする子どもたちのかかわりから生まれます。私たちは、事例を分析し発達を見通していくという日々の小さな積み重ねを大切にし、幼児期の潜在的な学びを小学校の自覚的な学びにつなげていきたいと思います。そして、校種間の違いを超えて、環境が変わっても、自分の力でそれを乗り越えられる子どもたちを育てていきたいと思います。



子どもは日々成長しています。育ちは連続で、一時も留まることはできません。その流れの中でより確かな育ちと学びを創りだすために、家庭や学校・園や地域・社会はどう関わり、どうつながつていけばよいのか…。今日は幼稚園と小学校、小学校と中学校のつながりについて2つの実践校の校（園）長先生からお話を聞きました。（財団・平山）

子どもの育ちと学びをつなぐ 幼・小・中の実践校の取り組みは：

活動リポート

小中で統一して授業スタイルなどを研究

成羽っ子教育推進協議会 代表 西井秀明（高梁市立成羽小学校長）

（平成25・26年度教育研究助成）

学校統廃合により平成24年度から町内学区内には本校と成羽中学校だけとなりました。中学校へは本校だから同じ子どもがそのまま入学するわけです。子どもの意識の変化は大きいのに、同級生がほぼ変わることはありません。状況は学年が一つ進むのと変わらないですね。だったらこの機に、9年間の成長を見通して、もっと緊密に小中が連携してできることはないだろうかと考えたわけです。

そこで、先生方には今まで以上に互いの学校のことをよく知ってもらうことにしました。小学校、中学校にはそれぞれ独自な教育文化、指導文化が根付いていますから、そこをお互いに知り、受け入れた上でないと、連携といつてもうまくいきません。授業参観や出前授業、合同研修などを頻繁に進めていると今までとは違った面から互いの学校や子どものことが見えてきます。例えば小・中での教科のつながりがイメージできたり、授業の工夫や発問の意図がよくつかめたり、生徒指導での課題なども見えてきました。昨年度は中学校教員が4年生理科、5年生国語、6年生英語で出前授業を行ったのですが、この発問の仕方はどうか、子どもの思考は小、中でどう違うのか、ノートのとらせ方はどうか、などを肌身で感じることができたのではないかと思っています。ただ、子どもにとっては授業スタイルが違うので、戸惑い感もあったようです。そこで、小中で統一できる授業スタイルやノート指導の研究もしてきました。相互の授業交流をすることは教育の異文化交流になります。先生方がお互いの学校の文化を知ろうとする意識が高まり、実践できたことは自分の指導を見直す機会にもなり、大きい成果です。

子どもたちの交流としては、中学校行事や部活動へ小学生の参加体験や授業参観をしています。サマースクールで夏休み中に中学生による学習支援も行いました。生徒たちも小学生に教えることで緊張感や自尊感情が育ちますしね。教えてもらっている小学生も先生とは違った感覚で新鮮を感じたのではないかでしょうか。小学生が中學生の大きい子と一緒に行事へ参加して楽しんでいる姿を見ると、「中1ギャップ」の解消に繋がるのではないかと感じています。

将来はもっと、9年間を見通した指導計画を作ったり、先生方が短期(1週間程)で異校種勤務研修をしたり、児童会と生徒会が合同で行事をしたり、そんなことができればいいなと思います。



学校でひらく舞台芸術教室

「身体表現の可能性」を追求

演出家・小野寺修二氏に聞く



舞台芸術のアーティストを学校に派遣して、子どもたちと一緒に創造活動を行い、子どもたちの表現力と創造性を育むための機会となるよう「学校でひらく舞台芸術教室」も4年目を迎えました。今年度は小野寺修二氏(カンパニーデラシネラ主宰)を講師に迎え、岡山市立朝日小学校と岡山市立竹枝小学校でワークショップを行いました。10月には各小学校と、旧内山下小学校で「ロミオとジュリエット」を上演します。演劇とダンスの世界を横断的に活躍している注目のアーティスト・小野寺氏にお話を伺いました。(財団・和田)

瀬戸内国際芸術祭2013の「人魚姫」に演出・出演で参加した感想を。

東京で僕らがよく見かけるような若者達から地元のおじいちゃんおばあちゃんまで、いろいろな人が船に乗っていたのが魅力的だった。島での生活は、時間の概念を揺さぶられる感覚があった。それは船の都合と関係があって、夕方の後はもうおそれと移動はできず、結果夜寝て朝起きるという生活になる。24時間開いているお店に囲まれた生活は便利なようで、逆に自然と共に生きている豊かさを思った。僕らの企画は毎日違う島を巡って3回公演、夕方島を離れて次また違う島へという行程だったので、精神的にも肉体的にも挑戦だった。島の人たちが暖かく迎えてくれたことが嬉しかった。

子どもたちとのワークショップを行うときに心がけていることは。

まずは興味を持ってもらうこと、身近に感じてもらうことが必要だと思う。自分自身が面白うだと感じ自発的に動けると、いろいろなことそして全てのことが早いと感じている。特に「やらないでいいこと」ではないので、自分がチャレンジしてみる、自分が手を上げる、自分が相手に働きかける、といった、受け身ではない姿勢が大切だと思う。

毎回ワークショップを終えた後は、いろいろ感じることが多く、もしかしたら子どもたちのためではなく、自分の糧になっているのかもしれない。

子どもは比較的、文脈じゃなくて感覚で物事をとらえている。そこに物語を見ていないので、事情だけで食いついたり飽きたり、思ったことをすぐ声に出す。あれ死んでんのとか、そういう反応がすごく楽しい。いわゆる「お尻だして笑う」みたいなことが子どもは好きだけどそれだけじゃなくて、「動きのリズム」に対しての生理的な反応が、大人より子どもの方がいいときがある。

「ロミオとジュリエット」を題材に選んだ理由は。

最近は古典のすばらしさを意識しています。本で読むシェイクスピアと違う…身体や視覚的なもので出会いが渡せたらと思い「ロミオとジュリエット」を選んだ。「ああロミオ、ロミオ! どうして貴方はロミオなの」という台詞や、キャビレット家モンタギュー家という単語と同時に、そこに流れる関係、感情をその場で立上げたい。古典は、何百年も上演され続けてきているので、ある種の普遍性をはらんでおり、その役割が果たせる素材だ。

意外にそういった名作は、大人でも断片しか知らないことが多い。いずれ違う形で、もう1回読んでみようかなと思ってもらえると嬉しい。

シェイクスピアは、巧みなセリフを聞かせる表現なので、その面白さを視覚で伝えられたら、違う形のシェイクスピアが経験できるのではと模索しているところ。そういう意味では今回は、ダンサーや役者の他にいろんな仕掛けもあり、我々自身の身体表現の可能性を試みる公演である。

場面のどこか1シーン、断片でも持ち帰ってもらいたら嬉しい。



朝日小と竹枝小、旧内山下小で「ロミオとジュリエット」



小野寺修二 ————— Shuji Onodera

演出家。カンパニーデラシネラ主宰。日本マイム研究所にてマイムを学ぶ。95年~06年、パフォーマンスシアター水と油にて活動。その後文化庁新進芸術家海外留学制度研修員として1年間フランスに滞在。帰国後、カンパニーデラシネラを立ち上げる。作品はマイムの動きをベースに台詞を取り入れた独自の演出で、世代を超えた観客層の注目を集めている。主な作品として、「あらかじめ」(11年青山円形劇場)、「オイディップス」(11年静岡芸術劇場)、「カラマーゾフの兄弟」(12年新国立劇場)等。また、ダンストリエンナーレトーキョー2012で「ロミオとジュリエット」、瀬戸内国際芸術祭2013で屋外劇「人魚姫」を発表するなど、劇場内にとどまらないパフォーマンスにも積極的に取組んでいる。近年は、音楽劇や演劇などで振付の担当もしている。「叔母との旅」(松村武演出)ステージング、「ハーバー・リーガン」(演出長塚圭史)の振付で、第18回読売演劇大賞最優秀スタッフ賞受賞。

「ロミオとジュリエット」新演出で岡山上演—悲劇と廃校の美しい関係。

日時 | 2014年10月4日(土)・5日(日) 両日開演17:15

会場 | 旧内山下小学校(岡山市北区)

料金 | 全席自由

一般前売 3,000円 一般当日 3,500円 学生前売 1,500円 学生当日 1,800円

高校生以下 1,000円(前売・当日共通)

お問い合わせ・お申し込み | NPO法人アートファーム

Tel 086-233-5175 E-mail info@artfarm.or.jp

<http://www.artfarm.or.jp>

岡山市立朝日小学校 校長 西 弘子さん

小野寺さんのパントマイムに、65名の子ども達は、一瞬にして心をつかまれたようでした。子ども達の集中力を切らすことなく次々と課題を与え、テンポよく90分間のワークショップを行う小野寺さんの指導は、私たち教師にとっても勉強になりました。子ども達が生き生きと身体で表現し、積極的に発表する姿が印象的でした。本物のパントマイムに触れ、すばらしい感動の時間を共に過ごすことができました。

岡山市立竹枝小学校 保護者 大塚 愛さん

先日竹枝小学校にてパントマイムの授業があり、見学をさせていただきました。東京から来られた小野寺さんと藤田さんの2人の講師の方が、体を使ついろんなワークをしてくださいました。講師の方のうまい動き方に触発されて、子ども達も椅子を使ったワーク、2人組で体を支えるワークなど、楽しそうに動いていました。昨年と一昨年は北村茂美さんの指導で、創作ダンスを経験させてもらい、犬島での発表会は感動的でした。一流の表現をされている方の授業は、子ども達に「真剣さ」と「本物の面白さ」を与えてくれる貴重な機会だと思いました。

助成対象者にはさまざまな人がいます。地域でユニークな活動をしている人、伝統や歴史を掘り起こしている人、地域資源に新しい価値をみつける人。この「FACE」ではそんな人々に会いに行きます。

「玉島」——まちを編集する女性たち

江戸時代の干拓でできた倉敷市玉島地域（旧玉島市）は北前船の寄港地として栄え、新町通りの回船問屋の倉庫や商家の屋敷は当時の栄華を語っています。この玉島地区で文化活動している「たまログ実行委員会」と「玉島茶室群研究会」のメンバーの方にお会いしてきました。（財団・和田）

文化や暮らしを記録した古い写真をアーカイブ化する

| たまログ実行委員会 代表 安原梨乃さん |



写真のアーカイブ化を始めたのは1年前。玉島町並み保存地区にある嫁ぎ先の実家—古い商家と蔵の建物—を残すか残さないかという問題が動機となって活動を始めた。最初は建造物として維持していくために倉敷町家トラストで勉強を兼ねて5年ほど活動をしていたが、ハードとして建物を残していくには限界を感じた。そのものが残せないとしたら、何が残せるか、何ができるだろうかと考えたときに、「写真」だと思いついた。

ご近所で親交のあった玉島茶室群研究会の安原さんやIDEA R LABの大月さんに相談しているうちに自分の考えがまとまり、たまログ実行委員会を立ち上げることにした。

急速な社会変化にともない、培われてきた産業や生活文化の多くが消え、建造物や歴史資料なども失われている現在、この活動を通して、これからこの地域社会でどのように暮らし、未来を形つくっていくのか、改めて見つめ直す場を育んでいきたいと語った。

現存している茶室の調査とその活用

| 玉島茶室群研究会 代表 安原早苗さん |



西爽亭（国登録有形文化財）の茶室がつぶれそうだという話を耳にした安原さん。なんとかしたいと思っていたとき、玉島出身で茶室研究専門としている池田俊彦先生とご縁があり、相談したのが始まり。かつて玉島には茶室が400ぐらいあって、今でも40くらいは現存しているといわれている。それを単体ではなく「茶室群」として捉え、チェックシートをもとに調査を開始。現在は7茶室調査が終わっている。

裕福な町衆が多かった玉島は、古くからお茶で人をもてなす文化が根づいていた。調査やたまログ実行委員会との情報交換のなかで、当日の写真や茶会記、忘れられていた歴史や物語が掘り起こされることも期待できる。茶室巡りや茶室の展覧会を開催しながら、新たな活用方法を模索中。

廃材の創造的な再利用を考える活動

| IDEA R LAB 代表 大月ヒロ子さん |



東京で美術館や博物館などの企画関係の仕事をしていた大月さんは、東日本大震災をきっかけに、生まれ育った玉島の実家を、廃材やはんぱなモノを再利用したものづくりやワークショップを行うクリエイティビリユースの拠点IDEA R LABに改築。その頃、もともと知り合いだった安原さんに相談を受け、たまログ実行委員会のアドバイザーとして参加。また、玉島茶室群研究会の調査のお手伝いもしていた。

IDEA R LABを目がけて全国から若者が訪れている。遊びに来た若者たちの中には、自然に崩壊している玉島のまちに魅力を感じ、移住を決めた人もいるという。

コミュニケーションが希薄になっている現代社会の中で、ある意味濃密なコミュニケーションが残っている玉島地区を新しい形に編集しながら若い方につないでいきたいという思いを持っている。

3つの活動は、歩いていける範囲でそれぞれ始まり、お互いに協力し合い、情報交換をしながら展開しています。活動を通じて、これから暮らしや働き方を考えることーが共通の思いでした。

Information

新役員のご紹介

6月の理事会・評議員会で新たに3名の役員が就任しました。評議員には、山陽放送株式会社代表取締役社長・原憲一氏と岡山大学副学長・許南浩氏が、また常任理事には、現事務局長の中野行雄氏が選任されました。

会のなかで、原憲一氏は「財団の事業は内外で高く評価されおり、その財団の評議員として携わっていくという大役ですが、頑張ってお役に立ちたいと思っています」と、また許南浩氏は「教育の面では、本業とも関係しておりますので勉強させていただきながら、力を尽くしたいと思っています」と豊富を語りました。

なお、役員の一覧につきましては、ホームページの財団の概要をご覧ください。

ホームページをリニューアル

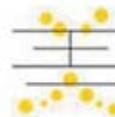
財団では、表彰・助成事業をはじめ各種の事業や取り組みを、より多くの方に知っていただけるように、公式ホームページのリニューアルを行いました。新しくなったホームページでは、情報を整理し、分かりやすく見やすいデザインにし、また皆様がより快適な環境で閲覧、活用していただけるようにしています。

今後は内容の充実を図り、より魅力的なホームページになるよう努めてまいりますので、是非、ご利用ください。

公式ホームページ <http://www.fukutake.or.jp/ec/>

Full of light

青地大輔



岡山県南の秘密の森。

深夜、人知れず光が溢れる場所がある。特別遠い山奥という訳ではない。

石垣に囲まれた幾つの敷地は、人がいなくなった長い間に草木が浸食し森になった。そして、いつからかは知らないが新たな住人となった光の主が、日が沈み森が暗間に包まれると決まった時刻に山の上から降りてくる。

満天の明かりが静かな森の中に溢ればじめるのだ。その神秘的な光景は宇宙が生まれているかのようにも見え、その美しさは、見る者の心を魅了する。

通常、ヒメボタルのメスは草の茎や枝に捕まって発光し、それに惹かれてやってきたオスと交尾し受精すると翌日産卵し、その生涯を終えてしまう。そして1ヶ月で羽化して幼虫となるのだ。(成虫の寿命はオスで7日、メスで2~3日といわれている。)

あまりにもかなく美しい。

彼らは、光を当てられることをとても嫌がる。そして、産卵場となる茂みに立ち入られることもだ。近年、こういった場所へ訪れる人達のマナーが度々問題視されている。自然が見せる美しい光景を今後も楽しみたいのであれば、そこでの人間本意の行動を見直し、共存について考える必要があるのだ。今後も岡山の多くの森でこういった光が未来の時間でも見えればと願う。

あおちだいすけ／写真家、ブルーワークス PHOTO & DESIGN Office 代表、犬島時間実行委員会代表。1973年岡山市生まれ。写真及びデザイン業を営むとともに2004年よりアートを通じ、コミュニケーションを図ることを目的としたプロジェクト「犬島時間」を企画主催。人材の育成と発掘・地域づくりに取り組む。2013年福武文化奨励賞、岡山市文化奨励賞受賞。

Editor's Column

私は花を育てることが好きだ。私の花づくりは、様々な植物を同じ鉢に植える寄せ植えではなく、一種を一鉢に植えてその個性に合わせて育ててあげる。水やり、土の酸性度、栄養、日当たり、成長に応じた植替えや鉢の大きさ、剪定の時期・方法など、全ての植物の好みが違うからだ。

その結果、咲く花は違ったものになってくる。紫陽花(あじさい)が、酸性土壤では青の発色が強いことはよく知られている。また、同じ一株から咲く花も、時期により色を異にする。同種の花であっても、それぞれに個性があり魅力的だ。そして同時期に咲いた花々を彩りよく配置すると、個を損なわずに全体として一層魅力的になる。

そこで個と全体、一人ひとりのアーティストと活動団体や地域との関係に思い至る。集合体であっても、構成員にはすべて個性があるからだ。

では地域振興という場合の「地域」とはどのようなエリア? 小学校や中学校単位? 自治体単位? 私は魅力的な個が集まつた場所が、幸せな場所…「地域」と思っている。(財団・中野)



機関誌 不易 F U E K I vol.55 2014.9.25

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の想いが込められています。

編集・発行:

公益財團法人 福武教育文化振興財團

〒700-0807 岡山市北区南方3-7-17

株式会社ベネッセコーポレーション本社3F

TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190

URL <http://www.fukutake.or.jp/>

E-mail cczaidan@fukutake.or.jp

制作:

株式会社 吉備人

デザイン:

田中雄一郎 (QUA DESIGN style)

印刷:

広和印刷株式会社



人づくり、地域づくりを応援します
公益財團法人 福武教育文化振興財團

FUKUTAKE
EDUCATION AND CULTURE
FOUNDATION